

「話し合う力を育てる指導」編

さぬきの授業 基礎・基本

～ 子どもに学びのときめきを～

実践事例集V



平成27年3月
香川県教育委員会

目 次

I	はじめに	2 p
II	子どもの「話し合いたい」意欲を高める指導	3 p
	【小国】 聞き方の指導が話す意欲を高める	4 p
	【小音】 言葉にする前に動きにしてみる	5 p
	【小総】 情報カードを操作しながら話し合わせる	6 p
	【小図】 見る視点を共有する	7 p
	【中数】 説明できそうな考え方を選択させる	8 p
	【中理】 協力せざるを得ない状況をつくる	9 p
	【中美】 各々の考え方をマップに位置付け、違いを明らかにする	10 p
	【中保体】 作戦ボードやVTR等、同じものを見ながら話し合わせる	11 p
	【中英】 話し合う目的の明確化と話し合った成果の実感	12 p
III	話し合いが成立する条件を整えた指導	13 p
	【小社】 役割演技によるシミュレーション	14 p
	【小家】 予め自分の工夫を記述させておく	15 p
	【中国】 付箋紙の活用で根拠の妥当性を吟味する	16 p
	【中社】 資料の精選により根拠を明確にする	17 p
IV	話し合いの課題を明確にする指導	18 p
	【小算】 子どもの問いを話し合いの課題とする	19 p
	【中音】 工夫する箇所を絞って課題を焦点化する	20 p
	【中技家】 分類することで偏りに気付かせる	21 p
V	話し合いが苦手な子どものための指導	22 p
	【小社】 言葉を補う自作資料の活用	23 p
	【小理】 イメージ図の表現をもとに話し合わせる	24 p
	【小体】 話し合う場面や手順を焦点化する	25 p
VI	おわりに	26 p

I はじめに

本冊子は、「さぬきの授業 基礎・基本 ～子どもに学びのときめきを～」(平成 25 年 3 月 香川県教育委員会発行)のⅡに書かれている 3 つの内容を小・中学校の授業で具現化した実践事例集です。

平成 26 年度は、香川県小学校教育研究会、香川県中学校教育研究会から合わせて 150 事例を提供いただき、本冊子では、その中から「話し合う力を育てる指導」をテーマに、19 事例を紹介しています。

「話し合い活動はしたいけれど、進度を考えると…」と躊躇している先生もいるかもしれませんが、しかし、本当の進度とは、教科書を消化していく進度ではなく、子どもの分かっていく進度であるはずで

す。「知識の幅を広げ、いかに多くの学んだ知識を再生できるかが学力である」という古い学力観に立脚するならば、教科書の内容をどれだけたくさん情報伝達するかが、授業を進める私たちの責任ということになるでしょう。しかし、学校教育法第 30 条第 2 項に示された「基礎的・基本的な知識・技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「学習意欲等」の 3 要素を学力としてみる学力観に立脚するならば、問われることは知識の量だけではなく、質です。ゆえに、私たちの責任は、子どもの分かっていく進度を保証することであるとも言えます。

話し合い活動は、そのための授業には不可欠な活動となります。なぜなら、子どもは「教えたようには育たず、学んだように育つ」からです。いくら教師が伝えたと言っても、子どもが理解していなければ、情報は子どもにとっての知識にはなりません。子どもの外側に浮遊したままです。つまり、分かっているか、分かっていないかは知識を活用して子どもに表現させてみないと見えてこないのです。だからこそ、情報伝達を目指し教師が一方的に話し続ける授業ではなく、子ども達による話し合い活動が重要なのです。

また、知識には浅い、深いはありませんが、理解には浅い、深いがあります。課題を解決する際に働く思考・判断・表現を経て獲得した知識は、深い理解を伴った真に有益な知識と言えるでしょう。話し合い活動は、思考力・判断力・表現力等を育てる上でも有効な活動なのです。

本冊子第Ⅱ章では、子どもの「話し合いたい」意欲を高める指導について 9 事例を掲載しています。第Ⅲ章には、話し合いが成立する条件を整えた指導について 4 事例、第Ⅳ章には、話し合いの課題を明確にする指導について 3 事例、第Ⅴ章には、話し合いが苦手な子どものための指導について 3 事例を掲載しています。

本冊子で紹介している事例や留意点をご覧ください。その基となる考え方を「さぬきの授業 基礎・基本」に求めたり、「さぬきの授業 基礎・基本」から「これは具体的にはどういうことなのだろう」と問いをもって本冊子を開いていただいたりして、日々の授業改善に役立てていただけることを願っています。

なお、本冊子で紹介できなかった事例については、県教育センターのホームページ ([URL http://www.kagawa-edu.jp/educ/htdocs/](http://www.kagawa-edu.jp/educ/htdocs/)) に掲載していますので、ぜひご覧ください。

Ⅱ 子どもの「話し合いたい」意欲を高める指導

「さめきの授業 基礎・基本」16pには、「子どもは話したがっているのか？」と逆説的に問いかけ、子どもの「話し合いたい」という意欲を喚起する大切さが述べられています。

「話し合いたい」意欲を高めるために

☆ 香川の子どもは話したがっているのか？

☆ 話し合うことは大切なのか

○ 話し合うことの効果

- ・ 主体的になる
- ・ よく聞く態度が育つ
- ・ 論理を組み立てる力がつく
- ・ 物事の理解が深まる
- ・ 相手の話によって、自分の意見を修正する力がつく

話し合う意欲を高める実践を通して、次のようなことが明らかになってきました。

「子どもの『話し合いたい』意欲を高める」とは？

- 聞き方の指導が話す意欲を高める
- 言葉にする前に動きにしてみる
- 情報カードを操作しながら話し合わせる
- 見る視点を共有する
- 説明できそうな考え方を選択させる
- 協力せざるを得ない状況をつくる
- 各々の考え方をマップに位置付け、違いを明らかにする
- 作戦ボードやVTR等、同じものを見ながら話し合わせる
- 話し合う目的の明確化と話し合った成果の実感
- 自信をもたせるために、話し合う前に自分の考えを書く時間を設定する
- 自信をもたせるために、全体で話す前に少人数で話し合う場を設定する
- 意見の根拠となるものを用意しておく
- ペア交流の際、相手の話を聞いた後、「…ということですね」と聞き返して確認させる
- 表現力不足で伝わらないことを教師が代弁して補説する

「話し合う価値を自覚させる」とは？

- 話し合う目的を明確にし、話し合った成果を共有する
- ジグソー学習等、話し合う内容を分担する
- つなげて深める話し合いを称賛する
- 話し合った成果を掲示に生かす
- 振り返りの際、分かりやすい伝え方等友達の話型についても相互評価させる

ここでは、■の項目について、実践事例を紹介します。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 子どもの「話し合いたい」意欲を高める 聞き方の指導が話す意欲を高める

小学校第6学年 国語 単元「人物の生き方を考えながら読もう ―海のいのち―」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

物語が自分に強く語りかけてきたことを自分の言葉でまとめ、ペアやグループで話し合うことで自分の考えを高めしていく力

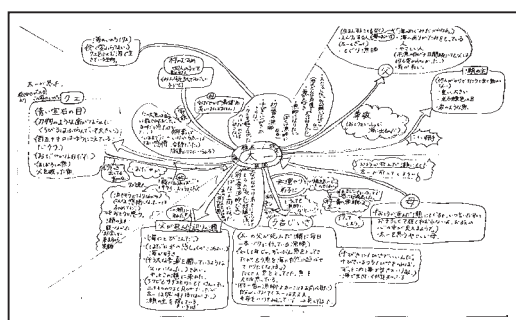
2 実践の概要

学習問題「物語が自分に語りかけてきたことを、短い言葉でまとめよう」を追究した。読みの過程で書き込んできた人物関係図を参考に、「海」に対する主人公の考えが表れていると思う文や言葉を洗い出し、物語が自分に最も強く語りかけてきたことを自分の言葉でまとめさせた。全ての子どもが話し合いに参加できるようにするために、ペアによる対話で自分の考えに自信を持たせた後にグループで話し合う場を設定した。

3 手立ての具体

具体的には、次のように展開し、自分の考えを明確にした上で、話し合いをした。

- ① 主人公を中心にした人物関係図をかかせる。
- ② 心に残った言葉や文を参考にしながら、物語が自分に最も強く語りかけてきたことを自分の言葉でまとめさせる。
- ③ ペアによる対話で同意点や相違点を探していく。話し手の1回の発言は短く、聞き手はあいづちを打ちながら聞くことや、自分の考えと比較しながら聞き、異同等について伝えることを予め決めておく。
- ④ グループで話し合う。



【人物関係図】



【対話する子どもたち】

【話し手】

- ・自分の考えを短く話す。
「～と思うよ。だって、～」
- ・相手に語りかけるように。
「～だよな。」「～でしょ。」
- ・聞き手の反応を見て、伝わっているか確認しながら話す。
「こまでは、いいかな。」「もう1回言うと～。」

【聞き手】

- ・反応しながら聞く。
「うんうん。」「なるほど。」
- ・自分の考えと比較して心の中で反応する。
「一緒だ。」「えーっ?」
- ・自分の考えを相手に返す。
「…は同じだけど、…についてはこう考える。どう思う?」

【対話の約束】

4 手立ての効果

対話によって自分の考えを確認し、伝えたいことを明確にすることができた。話題を焦点化し、友だちと普段話しているような言葉を使った対話は、楽しみながら進んで話そうとする意欲につながった。また、相手に自分の考えを理解してもらうことで、自分の考えに自信をもってグループでの話し合いに臨めた。ペアによる対話により、一人一人が話す時間を多くとれたことも、意欲を高めることにつながった。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

話し合いたいと思わせるためには、共感的に理解しようとする学級集団であるよう、普段の学級経営が大切である。自分の言うことに耳を傾けて受け入れてくれるという安心感が話そうという意欲につながる。話を聞くときには「うんうん。」「えーっ。」等、相手に関わりながら聞いた、自分の考えを相手に返しながらか話し合いを進めたりする指導が効果的である。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 子どもの「話し合いたい」意欲を高める 言葉にする前に動きにしてみる

小学校第2学年 音楽 題材「みんなの 音楽時計をつくろう」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

鑑賞した音楽を体で表現し、その動きを言葉に置き換え、友だちと関わりながら伝え合う力

2 実践の概要

学習問題「音楽に合わせて体を動かし、音楽時計のひみつを見つけよう」を追究した。音楽を鑑賞する授業において、「感じ取る」ことを大切にするために、「**動く**」ことを重視した。「**どうしてそのように動いたのか？**」を追究することで、一人一人の感じ方の相違に気づかせ、「**動く**」ことと**友だちと「関わる」**ことを繰り返すことで、この楽曲の「強弱の変化」のおもしろさを感じ取らせていった。また、「**動き**」「**言葉**」「**今まで学習した表現方法**」を関連させることで、音楽づくりにつなげた。

3 手立ての具体

具体的には、**子どもが動きによって表現した鑑賞音楽の「強弱の変化」を、図に置き換えて板書したり、「音楽時計から飛び出してきたもの」をワークシートにかいたりして視覚化した。**また、常時活動で行っている「対話活動」の補助シートをもとに話し合い活動を行った。



【体を動かす子ども達】



【ワークシート】



【ワークシートを見せながら何が飛び出してくるのかを対話する活動】



【2年生 対話シート】



【子どもの動きをもとに環境音楽を図で表す】

4 手立ての効果

小さい音の時は体を小さく丸めたり、大きな音になるとジャンプをしたり手を大きく振ったりする等子どもが体を動かすことで、「強弱の変化」をよりおもしろく感じる事ができた。また、「音楽時計から飛び出してきたもの」をワークシートにかくとき、体で感じた「強弱の変化」から、大きさの違った動物等にかく事ができた。教師からの、「どうしてそのようにしたのか？」の問いかけが、子どもにも浸透し、対話活動や話し合い活動において、友だちに質問をすることも多くなった。また、鑑賞して見つけたひみつを、音楽づくりに生かす事ができた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

低学年の子どもたちは、体を動かすことが好きである。夢中になったとき、また、何かに心を動かされたとき、きまって体が動き出す。音楽の中に、「動き」を取り入れることは自然なことである。「どうしてその動きにしたの？」と尋ねることで、自分の思いを表出できる話し手に、また、友だちの思いを受け止められる聴き手になることができ、低学年でも話し合いのできる子どもが増えてくるだろう。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 子どもの「話し合いたい」意欲を高める 情報カードを操作しながら話し合わせる

小学校第3学年 総合的な学習 単元「つたえよう！ふるさとのじまん」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

集めた情報を整理・分析・熟考する過程で、全校生や地域の人に伝えるために必要な内容を選択し、選択した理由を友だちの考えとの共通点や相違点を見付けながら話し合う力

2 実践の概要

子どもたちが住んでいる町（ふるさと）について調べたことを「ふるさとじまん事典—農産物編—」にして全校生や地域の人に伝えるために、**事典に掲載するのに有効な情報を決めたり追加したり修正したりする話し合いの場をコーディネートすることでよりよい事典をつくること**ができ、話し合う意欲を高めることができた。

3 手立ての具体

① 農産物（タマネギ・ブドウ・ブロッコリー）について調べた**多くの情報を、「種類」「歴史」「工夫や努力」「栄養」の観点から、事典にまとめる際の大切な情報「目玉情報」か、そうでない情報「おまけ情報」かに分類したり、「目玉情報」を吟味したりした。**

② 簡単に操作ができるように、**各人が調べた情報を野菜別グループでまとめてカードにしておき、カードを操作できるようにした。**

③ 操作を通して、話し合いながら情報の追加・修正を行うとともに、すばらしさを伝える有効性を考えることができるようにした。

④ グループごとに発表し、他のグループの内容を聞き、事典に載せる情報をどう改善するのか追加・修正し、有効性の観点から話し合うことができるようにした。



【操作を伴った話し合い】



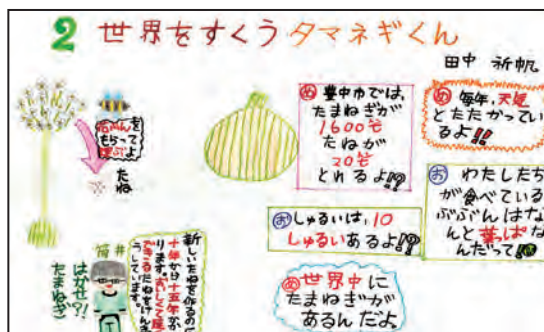
【グループの発表】

4 手立ての効果

情報をカードに書き出すことで可視化され、グループで話し合うときにこの情報は必要なものか、必要でないものか取捨選択しながら話し合うことができた。「この情報は一番にもってきた方が、みんなに一番に知らせたいことが伝わる」とか、「タマネギ博士が教えてくれた情報を入れることで、タマネギへの思いや苦勞がわかるよ」等と、他のグループとの比較を通して話し合ったり、情報の順序性や有効性を考えて並べかえたりすることができ、思考過程を顕在化することができた。そうすることで、よりよいものを作ろうという意欲が高まり、地域のじまんとしてふさわしいかどうか等、どのような内容について話し合ったらよいかという見通しにつながった。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

子どもの「話し合いたい」意欲を高めるためには、話し合いの意味やよさを実感させることが大切である。そのためには、情報を可視化したり操作したりできるようにし、自分の考えを表出しやすくする工夫や、話し合いの論点を明確にしたりする工夫が大切である。



【できあがった1ページ】

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 子どもの「話し合いたい」意欲を高める 見る視点を共有する

小学校第3学年 図画工作 単元「アートたんけんたい」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

いつも見ている景色から、遠近や角度等の見方を変えて美しさや面白さを見つける活動を通して、自分や友だちの見方のよさを見つけ、伝え合う力

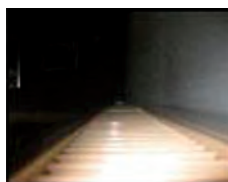
2 実践の概要

話し合いの中で自分と友だちとのものの見方の違いや共通点に気付けるような視点を示すことで、そのよさを「みる力」として認め合い、新しい見方で身の周りのものや景色をみることができるようになり、さらに話し合いたいという意欲を高める。

3 手立ての具体

いきなり写真を撮らせたのでは、構図のよさ等が表れにくく、ただの風景写真のようになってしまうことがある。そこで、全体での話し合いを通して、視点を共有できるようにした。

- ① 子どもたちの撮った作品を1例取り上げ、発見したよさを伝え合わせる。
 - ・ 作品のどこに注目したか、具体的に言葉にして話し合うようにさせた。
「右上の小さな丸が」「真ん中の真っ直ぐな線が」「空が四角に見えるところが」
 - ・ イメージマップを用い、形や色、感じ等のキーワードで見取った美しさや楽しさを比喻やオノマトペ等の多様な言葉で表現できるようにした。
- ② ペアで対話をしながら、相手の作品のよさを見つけて伝え合い、次時への意欲を高めた。
 - ・ 全体で話し合った「視点（遠近・上下・大小・角度・つながり・影等）」をもとに、自分たちの作品を見直し、よさを伝えるようにした。
 - ・ 同じ場所でも視点の違いによって見つけたよさや面白さが違うことに気付かせ、さらに新しい見方で写真を撮るようにさせた。



【子どもたちの作品例】

【視点を共有する板書】

4 手立ての効果

板書やワークシートで見るべき視点を示すことで、話し合いの中で「何を」「どのように」見るか、ということ子どもたちが意識し始めた。こうした活動を通して見ることの楽しさ、面白さを感じることができるようになれば、子どもたちが自分たちの作品やいろいろなアート、また見慣れた身の周りの物や自然を、主体的に見ることができるようになる。そして、対話を通して友だちの「ものの見方」を取り入れることにより、新しくいろいろな視点で「みる」ことを楽しめるようになる。また、お互いの見方のよさを具体的に感じることの楽しさや意味を実感できれば、話し合うことへの意欲が高まる。

話し合いの中で学んだ「みる力」はあらゆる表現活動の基盤となり、自分らしく創造する際に、材料や表現方法を選び取る判断や、表現の見直しの基準となる。美しさやよさを見取る力は、より豊かな表現を生み出す源になる。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

「なにを」「どのように」見るか、話し合いの中で子どもたちが感じ取ったことを、教師も視点を共有して見てみよう。「なるほど」「へえ～」と心を動かされることがあるだろう。それらを学級全体で共感しながらお互いの見方のよさを話し合い、認め合うことを楽しみたい。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 子どもの「話し合いたい」意欲を高める 説明できそうな考え方を選択させる

中学校第2学年 数学 単元「星形五角形の内角の和」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

演繹的に考えを進め、推論の過程やその結果を他者に伝わるように分かりやすく説明する力

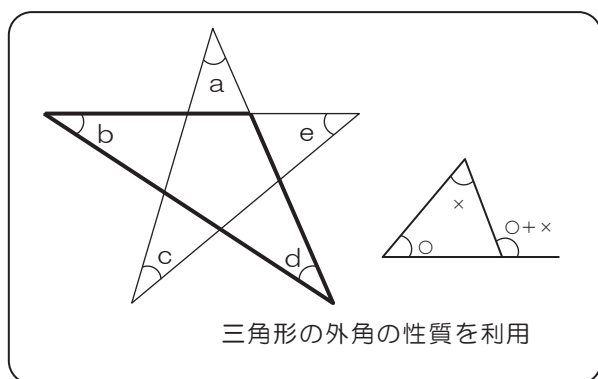
2 実践の概要

学習課題を「星形五角形の先端の角の和が 180° であることの新しい説明を考えてみよう」とした。本時は、前時とは異なる説明を考えることに重点を置いた実践である。

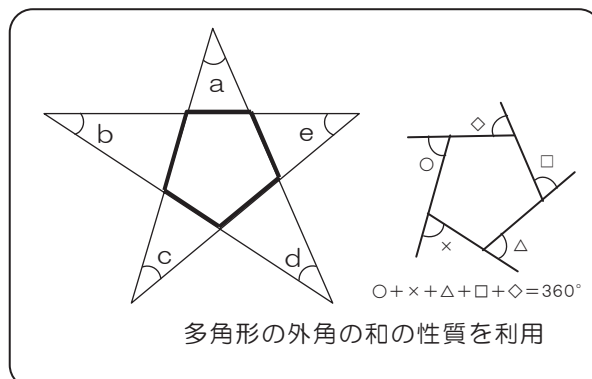
子どもの実態に即して、**用いる図形の性質を明確にした上で、それらをどのように用いるのかを説明し伝え合う活動**を取り入れ、説明の見通しを持たせた後に、各自で説明を記述させた。また、その説明がより簡潔で的確な表現になるよう、数学的表現を用いて相互に説明を修正する場面を設定した。

3 手立ての具体

「用いるもの」として、既習の図形の性質をヒントとして示し、その「**使い方**」に子どもの**思考が集中するよう意図**した。また、**根拠として用いる図形の性質ごとにワークシートを用意し、説明の見通しを持ってそうなワークシートを選択できるようにした**ことで、子どもに自信をもたせるとともに、自分の考えを表現してみようという意欲の継続をねらった。



【自分で考えを進められるワークシート①】



【自分で考えを進められるワークシート②】

4 手立ての効果

説明に用いる図形の性質ごとにワークシートを準備したことは、説明の根拠となる事柄を子どもが共有できる等、活発な話し合いの素地を整える上で有効であった。また、子どもが自信を持って課題に取り組んだり、友だちの説明を理解しようとしたりすることについても効果があった。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

子どもが自分の考えを伝えたり、友だちの考えを聞いて意見を述べたりするには、子ども一人一人が「説明できること」が前提となる。そのため、子どもの実態に即した仕掛けが教師に求められる。

また、本実践は正しい問題解決の方法論を比較検討することだけが目的でないことにも注意したい。例えば、三角形の外角の性質を用いて説明した子どもを認めた上で、「三角形の外角の性質を考えたときに基にしたことはどんなことだったかな？」と問う等、「演繹的に考えを進めること」すなわち、「証明は常に誰もが認める確かなことを出発点にして筋道を立てて考えを積み重ねていく必要があること」を子どもが意識できるようにする必要がある。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 子どもの「話し合いたい」意欲を高める 協力せざるを得ない状況をつくる

中学校第1学年 理科 単元「光の世界」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

凸レンズの簡易カメラを作製したり、それを使って写真撮影を行ったりする中で、学習した内容の活用について聞いたり教えたりする力。

2 実践の概要

光の単元のまとめとして実践を行った。学習課題「簡易カメラを使って写真を撮影しよう」では、凸レンズの簡易カメラを各自が作製し、それを用いて実際に写真の撮影を行った。まず、「各自が簡易カメラを作製しよう」では、**全体で手順の説明を聞き、班ごとに活動を行った。**簡易カメラを全員が自作するという目標に向かい、必然的に話し合う場ができた。また、学習問題「簡易カメラを使って実際に写真を撮影しよう」では、各自のカメラを用いて感光紙に写真を実際に撮影した。**実際に写真を撮影することを通して、お互いに聞いたり教えたりする場面が各班で見られた。**

従来は、教師が口頭で説明したり演示したりして終わらせることが多いが、**子ども一人一人にカメラ作製から印刷までを経験させた。**

3 手立ての具体

授業開始時には、凸レンズの復習を行った上で、カメラの簡単な仕組みを説明し授業を展開した。**その展開に関しては、学習内容を活用することで上手に写真が撮れることを伝え、子どもたちが相互に意見交換し合う場をつかった。**また、**カメラ作製や撮影時だけではなく、感光紙とアイロンを用いて各自が撮影したものを成果物として確認させる等して、子どもに学習内容が成果として現れることの実感を与えた。**

相互の話し合いを活性化させるために、①カメラの作製、②写真の撮影、③写真の印刷というそれぞれの過程で協力して活動する場面を設定した。このことにより、最終的に全員が写真を撮影し、印刷することができた。



【カメラ作製時の様子】



【写真撮影時の様子】



【写真印刷時の様子】

4 手立ての効果

目標がはっきりしているため、話し合い活動が必然となり、製作時や撮影時の注意点を確認し合う中で主体的な話し合いができた。また、「写真」という学習成果物も得ることができたため、個人の評価として自己評価ができた。特に、授業後の自己評価では、はっきりした写真が撮影できなかった場合も、その理由を考えて再度撮影したいという意見が出てきた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

発展的な学習は、時間的な面で課題があるが、子どもにとっては印象に残り、知識の定着にもつながる学習になる。教師が重点的に扱う単元を決めて実施することが望ましい。

さめきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 子どもの「話し合いたい」意欲を高める 各々の考え方をマップに位置付け、違いを明らかにする

中学校第1学年 美術 題材「色いろいろ」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

色のもつ感情について話し合う中で、互いの色に対する受け取り方の共通点や相違点に気づき、色から受ける感情やイメージを理解する力

2 実践の概要

色から受ける感情やイメージを感じ取り、その理由を話し合い活動を通して考えさせた。話し合い活動では、身近な風景や風物詩の画像を印刷した色カードを操作しながら色から受ける感情やイメージを分類、整理させた。そのためには、子どもがそれぞれの色から受ける感情やイメージをはっきりともつことが必要である。そこで、**自分の考えをもち、抽象的な色と感情の関係を明らかにするため、画像資料（裏：色カード）を「感性言語マップ」に位置付けるグループ学習を設定した。**その際、使用する画像資料は、できる限り身近な風景や品物を印刷したもので、象徴している色が分かりやすいものを用意した。

3 手立ての具体

話し合いのもとになる画像資料（色カード）は、次の点に留意して準備した。

- ・身近な色と感情を関連付けさせるために、できる限り身近な風景や品物の画像を使用する。
- ・画像から受ける色を限定するために、赤、青、黄、緑等のほぼ単色の画像を使用する。
- ・画像の裏には、表画像から受ける単色を印刷する。（裏の色でイメージを確認できるよう）

また、分類の手がかりとなる「感性言語マップ」は、次の点に留意して準備した。

- ・色イメージごとのグルーピング、色カードを並べられるスペースを工夫した。
- ・色イメージを導くキーワードをグルーピング（静的・中間・動的）して示す。

12枚の色カードと、色に関する言語マップ（台紙）を1セットとしてグループ数準備した。

グループ活動では、それぞれの色カードから受ける感情やイメージを子ども同士が発表し合い、相談の上、言語マップ上に配置していった。意見が異なる場合には、それぞれの意見をしっかりと聞き、納得いくまで話し合うよう指導した。



【抽象概念の色を具体操作で考える工夫】



【話し合いの結果を視覚的に確認できる工夫】

4 手立ての効果

子どもたちは、身近な風景や品物等の画像の色に注目して意見を述べることに興味を示した。「それは色ではなく、形から感じたことでは？」とお互いに指摘する場面も見られた。また、言語マップに色から受ける感情やイメージにつながるキーワードが示されているため、自分がその色から受ける感情を選び取り、自分の意見を述べることができた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

意欲的に話し合いに取り組みさせるためには、自分の考えを自由に発言できる授業の雰囲気づくりと、しっかりと自分の意見をもって話し合いに取り組みさせることが大切だと考えます。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 子どもの「話し合いたい」意欲を高める 作戦ボードやVTR等、同じものを見ながら話し合わせる

中学校第1学年 保健体育 単元 球技「ゴール型（フラッグフットボール）」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

チーム全員で協力して得点するために、個人やチームの特徴、プレイの内容や勝敗、ボールを持たない選手の動き等、分析を通して作戦を再考したり修正したりする力

2 実践の概要

学習問題「次の攻撃はパスプレイ？それともランプレイ？」を追究した。

フラッグフットボールで**アウトナンバーゲーム（攻撃3人、守備2人）**を行い、**次の攻撃はランプレイで行くのか、それともパスプレイで行くのかを考えさせた。**

そこには、攻撃回数、試合の得点差、相手チームのディフェンスメンバー等をもとに、自分たちの作戦を決定する総合的な判断が必要となる。

試合前にチーム全体で作戦を考える時間に加え、**プレイ直前・直後に作戦会議の時間（ハドル）を確保することにより、チーム全員が作戦を共通理解した上で作戦を実行し、成功させようと考えた。**

3 手立ての具体

① 子どもが作戦を考えやすいようホワイトボードと磁石を準備したり、VTRを活用したりした。**VTRの活用では、ボールを持たない選手の動きや空いている空間（スペース）に着目するよう助言した。**

② プレイ直前とプレイ直後に作戦会議では以下のように話し合いの論点を絞った。

- ・ **なぜ成功・失敗したか？**
- ・ **次のプレイをどうするか？**

4 手立ての効果

技能（「捕る」「投げる」「走る」）が他種目に比べ比較的易しいため、運動が苦手な子どもも意欲的に取り組んだ。

攻撃ごとに作戦会議の時間が必ずあることから、話し合い（Plan）→実践（Do）→成果の確認・見直し（See・Check）のサイクルによって、子どもたちの作戦会議は回数を重ねるたびに活発化した。

なお、アウトナンバーゲームのため、考えた作戦を成功させやすく、得点の喜びや成功体験を多く実感でき、活動への意欲が高まった。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

球技は、チームの作戦や戦術等の学習課題の解決に向けて、仲間との連携に焦点化して取り組むことが大切です。

そのためには、運動の苦手な子どもが参加しやすいチーム編成や教材・教具の工夫等の意図的な手立てが重要だと考えています。



【プレイ直前のハドル(作戦会議)】



【プレイ後に友人へ助言】



【成功体験がさらに意欲を高める】

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合う価値を自覚させる指導 話し合う目的の明確化と話し合った成果の実感

中学校第1学年 英語 単元「My Project 1 自己紹介をしよう」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

全員が自己紹介文を書く活動において、友達と協力し、よりよい自己紹介文となるよう話し合う力

2 実践の概要

従来、英作文の指導は、子どもが作成したものを教師が添削をすることが多かったように思われる。教師の指導に加えて、**話し合い活動を取り入れ、グループで協力して英文を作成することで**、子どもたちはお互いを高め合うことができると考えた。その中では、支援が必要な友達に対してアドバイスをしたり、励ましたりすることができる。そこで、自己紹介文がある程度仕上がった段階で、書く活動を小グループでの話し合い活動へとつなげた。

3 手立ての具体

- ① 教科書にある2つの自己紹介を理解させ、これまでに学習した英文から、自己紹介に使える表現を見つけさせる。
- ② 教科書で学習した表現を参考にして自己紹介文を書かせる。教師は、特に支援の必要な子どもにも助言を与える。
- ③ **4人組のグループを作らせ、班長を中心に班員の原稿を読み、間違いやさらによくなる表現はないかを話し合わせる。**英語が苦手な子どもには、使える表現等のアドバイスをさせる。
- ④ 教師の点検後、ペアで発音を確認しながら練習させる。その後、グループ内で発表させ、班員にアドバイスをもらう。
- ⑤ 全体で自己紹介をさせる。

④ グループで話し合いをしよう。 グループ活動

※右の原稿を見てもらい、間違いを直してもらったり、下にコメントやアドバイスをもらおう。(コメントはよかったことを書こう。)

コメント	きれいな字で、スペルも間違えずに書けています。相手に伝えない事がよく分かります！ good!! Thank you!	きれいな字でよみやすいです。間違いが少ないです。	きれいな発音で上手♡ 本番! ファイト!! さっちゃんもだよ!!!♡	発音の「フ」が綺麗に聞こえた。
------	---	--------------------------	---------------------------------------	-----------------

【ワークシートの例(一部)】

4 手立ての効果

それぞれのグループが、話し合いをうまく進められるかを心配していたが、話し合いを始める前に、この活動の目標等、意味や有用性について予め説明をしておいたことによって、班長を中心に、協力して話し合いを進めることができていた。

英語に対して苦手意識をもつ子どもも、周りのアドバイスをもらいながら英文を完成させることができていた。



【授業の様子】

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

話し合い活動の機会は限られているが、課題を明確にしたグループでの話し合い活動を取り入れることで、協力しながら主体的に取り組み、お互いを高めることができると思う。

Ⅲ 話し合いが成立する条件を整えた指導

「さめきの授業 基礎・基本」には、「話し合いが成立する条件を整えた指導」について、次のように述べられています。

話し合いが成立する条件を整えるために

- ☆ 子ども側
 - 話を聞く
 - まとめて整理して話す
 - 友達の発言を冷やかさない
- ☆ 教師側
 - 教師の言葉を減らす
 - 発言を取り上げる
 - 「もうない?」「ほかに?」と正答だけを求めない
 - 静かになってから発問する

これらを基にした実践では、次のようなことが明らかになってきました。

「話し合いが成立する条件を整える」とは?

- 役割演技によるシミュレーション
- 予め自分の工夫を記述させておく
- 付箋紙の活用で根拠の妥当性を吟味
- 資料の精選により根拠を明確にする
- 限られた時間で的確に自分の考えを表現させるためには、繰り返しが大切
- 付箋紙を用いて情報を整理し、話し合おうとする内容を明らかにする
- ブレーンストーミングの手法を用いて個人の意見をたくさん表出させる
- 同じ資料を異なる視点から見直す
- 情報を可視化し論点を明示する
- 事前にワークシートやノート等に自分の考えを書かせておく
- 途中まで書かせて残りは即興で付け足させるようにする
- 意図的・計画的に授業プランを吟味し話し合いの時間を生み出す
- グループの人数を最小限にとどめる
- モデルやイメージ図を使って説明させる
- ホワイトボード等をグループで加筆・修正を加えながら話し合わせる
- 板書や小黒板を使って説明させる
- ネーム磁石で立場を決めて話し合わせる

ここでは、■の項目について、実践事例を紹介します。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いが成立する条件を整えた指導 役割演技によるシミュレーション

小学校第6学年 社会 単元「みんなの願いを実現する政治」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

国家権力を3つに分けている理由を追究するために、大津事件について国会、内閣、裁判所のそれぞれの立場から意見を主張する力

2 実践の概要

学習問題「どうして、児島裁判長は大津事件を法律どおり裁くことが日本のためになると考えたのだろうか」を追究した。そのためには、ロシアを恐れ、超法規的な決着が日本のためだと考えた国会や内閣の立場を理解することが必要である。そこで、**役割演技によるシミュレーション**を行うことにより、それぞれの立場を理解させていった。その際、事実に基づいて話し合わせるため、指示書（台詞カード）を配布した。

3 手立ての具体

具体的には、次のような**指示書（台詞カード）と名札を封筒の中に入れ、グループごとに3つの封筒を配布した**。そして、くじびきの要領で役割を決め、役割演技するよう促した。台詞は、そのまま読んでアドリブを付け加えてもよいことにした。



【役割演技する子どもたち】

あなたは、**児島惟謙**です。
裁判所のリーダーとして、伊藤博文に向かって、法律通り「津田三蔵は死刑」に賛成するよう説得して下さい。根拠は、次の通りです。そのまま認んでも、自分のことばに直してもかまいません。

①「あなたたち、権力者の言う通りにしては、江戸時代と逆もどりだ。国の権力を3つに分けたのは、あなたたち権力者の勝手にできないようにするためだ。あなたたちの言いなりになったら、これから自分勝手に口出ししてくるでしょう。司法の独立を守り、三権分立を守っていくことがあなたたち権力者の務めです。」

あなたは、**松方正義**です。
内閣総理大臣として、児島惟謙に向かって、ロシアとの約束通り「津田三蔵は死刑」に賛成するよう説得して下さい。根拠は、次の通りです。そのまま認んでも、自分のことばに直してもかまいません。

①「法なんかどうでもいい。国がほろんだら意味がない。」
②「家は、ニコライ皇太子が来る前に、ロシアともし、皇太子をおそ

あなたは、**伊藤博文**です。
国会の貴族院議長として、児島惟謙に向かって、ロシアとの約束通り「津田三蔵は死刑」に賛成するよう説得して下さい。根拠は、次の通りです。そのまま認んでも、自分のことばに直してもかまいません。

①「法を守っていても、国がほろんだら意味がない。本当は日本だけだけど、天罰に対する罪を応用したら、法律通りに死刑にできる。」
②「ロシアとの約束通り死刑にするべき。今は怒ってなくても約束を破ればロシアは怒るだろう。戦争になったら勝ち目は無い。国民も死刑に賛成しているはず。」
③「天皇も死刑を認めてくれた。天皇が危険をかえりみず、ロシアの軍艦にまで乗ってお見舞いしているのに、その努力をむだにしてはほけない。」

【史実に基づく根拠を示した指示書(台詞カード)】

4 手立ての効果

あえて、法律通り裁くべきか否かという子ども個々の考えとは別に、くじびきにより国会、内閣、裁判所のそれぞれの立場に立たせたことにより、立場の転換が図られ、話し合いが活性化しました。また、史実に基づく根拠としてそれぞれの台詞があるため、自信をもって役になりきる事ができました。

それぞれの根拠が明らかになった時点で、もし、自分ならどうするかと投げかけた。右はその場面の授業記録である。

<ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/> 整理するよ。津田三蔵は、当時世界の強国であったロシアの皇太子にけがをさせた。その津田三蔵を死刑にしないといけないのが、時の内閣総理大臣伊藤博文、国会もどちらかというと同じような意見。天皇は、注意して厳しきと言っている。さあ、みなさんが小島判事なら、どうしますか。 <input type="radio"/> どうして？ <input type="radio"/> 実はね。法律通りに裁いたんだ。司法の独立を守って、国際社会からも評価されたんだね。 	<p>ことである・・・(後略)・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/> 重罪にする。 <input type="radio"/> いや法律どおり、軽い刑にする。 <input type="radio"/> だって、戦争になったら、ロシアに植民地されるかもしれない。戦争のきっかけになる事件だから。 <input type="radio"/> いや、法律通りにしない方がばかにされる。
<ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/> 小島は、戦争になるかもしれないのに、法律通りにしたんだね。 <input type="radio"/> 「時間を広げて」「三権に分かれる前と比べ」 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="radio"/> どうして、法律通りにしたのかな。 <input type="radio"/> 憲法ができたばかりだから、それを守ろうとしたのではないかな。 <input type="radio"/> 権力者の一存で、判決が変わっていたら、いつまでたっても治外法権のままだからだと思う。 <input type="radio"/> 権力者に従うのではなく、法律に従ったんだ。 <input type="radio"/> 法律は、国民が認めたものだから。国民主権では、一番強いもの。

【授業記録の一部】

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

話し合いが成立するためには、相手に伝える価値のある個々の情報と、話し合う共通の土俵が必要。本実践では、それぞれに自分しか知らない情報を与えたのがよかったように思う。

さめきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いが成立する条件を整えた指導 予め自分の工夫を記述させておく

小学校第5学年 家庭 単元「家族の心も体もぽっかぽか～ご飯とみそ汁に思いをこめて～」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

既習内容を生かして「家族が笑顔になるオリジナルみそ汁」を考える過程で、みそ汁にこめた家族への思いとそれを具現化するための手立てを言葉に表し、自分の考えを明確に伝える力。

2 実践の概要

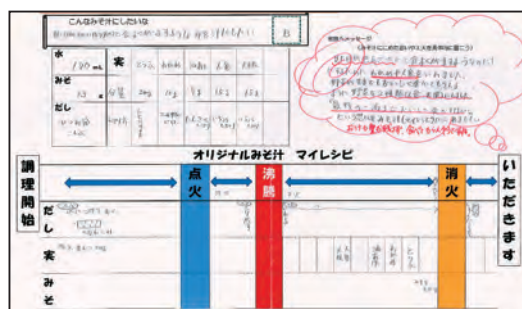
単元の終末である本時の学習問題を「家族に喜ばれる『みそ汁マイレシピ』を完成させよう」とし、オリジナルみそ汁を各自が考えた。自分の考えを伝えるには、①家族への思いが明確に示されていること、②それを具現化したものを視覚的に示すことが必要である。そこで、**ワークシートの活用**により、上記の内容を紙面上に示すことができるようにした。話し合いの際にはワークシートを交換したり、自分との異同を見つけたりしながら、考えを深めていった。

3 手立ての具体

具体的には、次のような**2種類のワークシート**を示した。①では、**みそ汁の具体とそれにこめた自分の思いを示せるようにした**。②では、**点火から消火までを時系列で表し、どのタイミングでどのような作業を行うのか、工夫や理由を書き込めるようにした**。これらを手持ち資料にして、話し合い活動の場面では、さらに実際に選んだ実を汁椀に入れて確かめる活動を入れ、実物を見せ合って実の組み合わせ・量・色どり等を相互に助言できるよう促した。



【①みそ・実・だしの要素でおいしさを探るワークシート】



【②家族への思いと自分の工夫が書き込めるワークシート】

4 手立ての効果

家族への思いや「こんなみそ汁にしたい」という願いを具現化するための自分の調理計画を、水の量やだしの取り方、実の組合せと切り方、加熱する順等詳細に記述させた。**「みそ・実・だし」の観点で自分の工夫をワークシートに記入させる**ことで、自信をもって話し合う姿が見られ、様々な工夫で願いが実現できることに気付いた。このワークシートは炊飯や基本のみそ汁作りでも使用し、単元を通して活用しており、調理手順や材料の分量、切り方等、基礎的・基本的な事項を継続的に追究することができた。

「しっかりと火を通すためには、固い物から入れることをゆで野菜サラダで学んだ。だからにんじんや大根を先に入れるよ。」「香りを大切にしたいから、みそは消火間に、ねぎは消火後に入れよう。」と加熱調理の視点で材料を入れるタイミングと理由を話し合えた。また、「家族の健康を考えて、野菜たっぷり」「栄養バランスのよい実の組み合わせに…」とオリジナルみそ汁にこめた家族への思いをメッセージに記入し、「みそ・実・だし」における自分の工夫を明確に伝えることができた。

【家族への思いを具体で表現した話し合いの様相】

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

話し合い成立のためには、自分の考えを明確にもつこと、視覚化して分かりやすく伝えることが必要。話すだけでは情報が消えてしまうので、自分の思いを文字や図に表しておくと呼びやすく、自分自身もぶれない。今回はワークシートで枠組を示して、書く内容の共通理解を図った。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いが成立する条件を整えた指導 付箋紙の活用で根拠の妥当性を吟味する

中学校第1学年 国語 単元「根拠を明確にして書こう」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

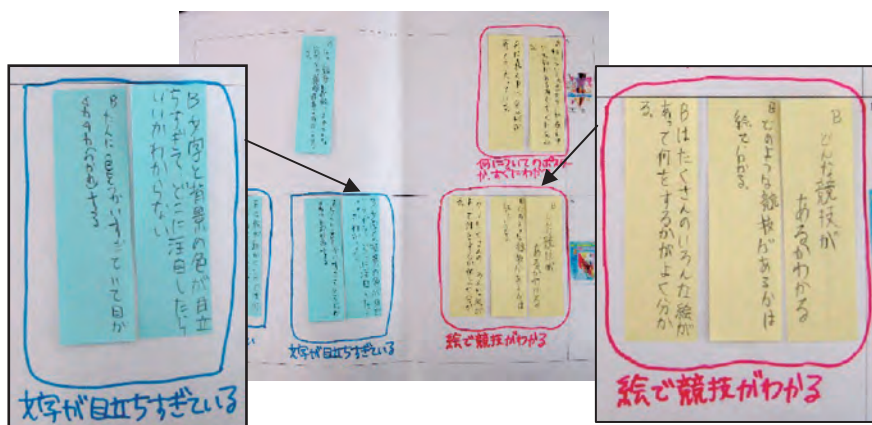
根拠を明確に示した意見文を書くために、自分の考えをもって話し合いに参加し、自分の考えと友達の考えとを比べながら整理する力

2 実践の概要

学習課題「説得力のある意見文のために長所・短所を見つけ、根拠を考えよう」の中で、二つのポスターのどちらを採用するかについて、根拠を出し合い、話し合う場面を設定した。説得力のある意見文には、主張を支える根拠を示すことが重要であるが、読み手が納得する根拠を挙げたり、根拠の正当性を検証したりすることは子どもにとって容易なことではない。そこで、根拠となる事実を付箋紙に書き、それをグループで整理させることにより、意見交換が活発になるようにした。

3 手立ての具体

色・デザイン・文字の大きさ等視点を与えてポスターの長所・短所を比較させた。次に、それぞれの長所と短所に色分けした2色の付箋紙に一つずつ書かせた。そして、①それぞれの意見を出す、②同じ意見をまとめる、③新たな意見を考えるという話し合いの手順を示して、付箋紙を整理させた。



【話し合い活動で付箋紙を整理する】

(3) 学習指導過程 (太字は分かる授業のための工夫・改善点)	
学習内容および学習活動	教師の指導・支援活動と留意事項
3. 資料のそれぞれの長所と短所を書き出す。	・資料をよく見て、違いに着目することで長所と短所に結び付けていくように助言する。 ・個人で考えてワークシートにまとめる時間を十分に取って、自分の考えを持って話し合いに参加し、話し合いが活発に行えるようにする。
(1) 個人で考える。	・できるだけ具体的にまとめるように、助言する。
(2) グループで話し合い、よいものを選んで、新しく作ったりする。	・一つずつ付箋紙に書き込ませて、あとのグループでの話し合いがスムーズに進むようにする。 ・一人一人の意見を取り上げやすいように、4人グループとする。
(3) グループで話し合ったことを発表する。	・話し合いを活性化するために、まずグループ全員の意見を聞き、次に同じ意見をまとめたり新たな意見を考えたりするよう指示する。 ・机間指導を行い、意見があまり出ていないグループがあれば、新しいアイデアが出るように見比べる視点をヒントとして与える。 ・説得力があるかどうかにはこの段階ではあまりこだわらず、受容的な態度で互いの意見を述べ合う雰囲気を作る。

【指導案の一部(グループでの話し合い)】

4 手立ての効果

付箋紙を使用することで、例えば「1枚は必ず書く」「6枚以上でA評価」等具体的な数値目標を上げることができる。これにより、全員が自分の意見をもって話し合い活動に参加することができた。そして、話し合いの手順をはっきりと示すことで、子どもは付箋紙を並べ替えたりまとめたりしながら、話し合いを活発に行うことができた。また、個々の表現の仕方には個人差があるが、グループでまとめていく過程でそれぞれの付箋紙を見比べることができるので、説得力のある表現の仕方について学び合う姿勢が見られた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

何を話し合えばよいか分からない、自分の考えをもっていない状態では話し合いは成立しない。本実践では、個人で考える時間を確保し、比較のポイントや話し合いの手順を明確にしたことでその後の話し合いが活性化した。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いが成立する条件を整えた指導 資料の精選により根拠を明確にする

中学校第1学年 社会（歴史的分野） 題材「古（いにしえ）からの挑戦状」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

考古学資料を題材に、既習の知識や資料を活用しながら、根拠を明らかにして自分の意見を述べる力

2 実践の概要

本題材は、単元「東アジアのなかの倭」（歴史的分野）の発展学習として実践した。「原始・古代」は文献資料が少ないが、子どもが想像力をかきたてられる興味・関心の高い時代区分である。導入部分で、堅穴住居跡から見つかった5体の人骨を扱った自作の映像資料（歴史ニュース）を視聴させ、興味・関心を喚起した。その後、「歴史ニュースを見て、事件の謎を解こう」と学習課題を設定し、5体の死因を考えさせた。いろいろな予想ができるが、根拠を明らかにした個人の考えをグループ内で交流し、友達の多様な考えに触れさせ、思考に広がりをもたせた。

3 手立ての具体

一斉授業では、意見が出しにくく発表者が固定化することがある。そこで多様な意見を引き出すために、次の3つの手立てを用意した。

① 資料の精選

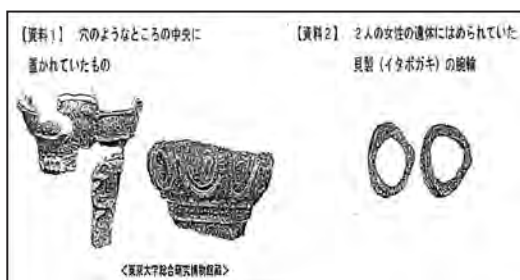
1年生の発達段階で、配布する資料が多すぎると思考が分散する。そこで教師が精選した、根拠となるいくつかの資料をプリントに集約して配布し、自分の考えを持ちやすいように工夫した。

② ワークシートの活用

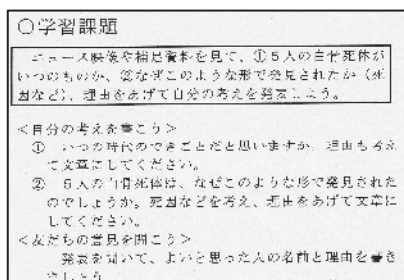
意見を求められると、すぐに発言しにくい子どももいる。そこで、話し合いをする前に、自分の考えをワークシートに書かせる。その際、「**〇〇と〇〇の資料から～と言える**」等根拠を明らかにすることを指示した。

③ グループ編成・配置

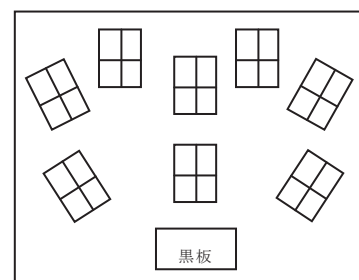
生活班のように構成員が多くなると、話し合いに参加しにくい子どもが出てくるため、**全員が参加できるように、4人グループを基本とした。**また、子どもが学習中、教師や板書が見えやすく集中できるように、放射状にグループを配置した。



【精選した資料の一部】



【根拠を明らかにするためワークシート】



【グループ配置】

4 手立ての効果

提示する資料を精選したため、根拠となるものを見つけやすく、すぐに自分の考えを書けていた。自分の考えを一度、ワークシートにまとめる作業を取り入れることで、グループ内でも自信をもって話し合い活動に参加することができていた。また、歴史的事象の意味を明らかにする方法を知ったり、歴史を学ぶおもしろさを感じたりすることができていた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

話し合いを成立させるためには、まず子ども自身が自分の意見をもつことが大切である。話し合いの際には、根拠を示して相手に説明できると説得力が増す。授業の中で、自分の意見が承認されたり、評価されたりする場面設定を積み重ねていくことが大切である。

Ⅳ 話し合いの課題を明確にする指導

「さめきの授業 基礎・基本」には、「話し合いの課題を明確にする指導」について、次のように述べられています。

話し合いの課題を明確にするために

☆ 話し合いの課題を明確にする指導

- 自分の意見をもてば、話したくなる
- しかし、何を考えればよいか分からなければ、自分の意見をもつことはできない
- 話し合いたくなるような具体的で分かりやすい課題を設定しましょう

これらを基にした実践では、次のようなことが明らかになってきました。

「話し合いの課題を明確にする」とは？

- 子どもの問いを話し合いの課題とする
- 工夫する箇所を絞って課題を焦点化する
- 分類することで偏りに気付かせる
- カードに各々の考えを書かせ、黒板上で類別する
- 意見の違いを明確にするように助言する
- 論点を絞る発問をする
- 話し合わないと解決できない課題を設定する
- 自分の意見をもちやすい課題を設定する
- データを収集し結果を予測させておく
- 多様な考えが生まれる課題を設定する
- 子どもにとって意外性のある課題を設定する
- グループ毎に観点を分担して話し合わせる

ここでは、■の項目について、実践事例を紹介します。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いの課題を明確にする指導 子どもの問いを話し合いの課題とする

小学校第5学年 算数 単元「順々に調べて」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

具体的な操作活動の限界から、2つの量の依存関係に着目し、図や表をつないだ話し合いを通して、変わり方のきまりを見付ける力

2 実践の概要

紙を折る操作活動を行いながら、伴って変わる数量の変化を調べていった。その時、折った回数が増えると操作活動で調べるには限界があることから、学習問題を「折った回数が増えると、長方形の数がどのように増えるかきまりを見付けよう」と設定した。話し合いの中で、子どもが図や表等をつないで話し合いができるように、どの考えをどの順に取り上げていくかを吟味し、学習問題に沿った話し合いになるようにした。

3 手立ての具体

① 具体的操作活動を行うことで、折った回数が増えると実際に調べるのに限界があることに気付けるようにした。そこから「折った回数を増やしたときにはどうやって調べればよいだらう」という問いが子どもから生まれるようにし、調べたいという意欲へとつなげていった。

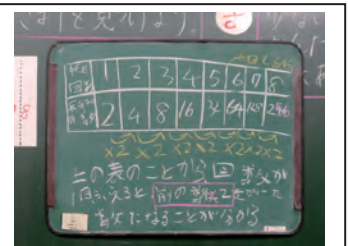
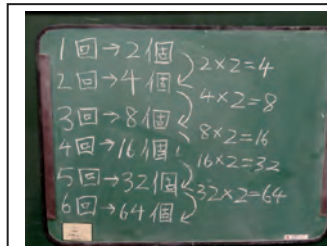
② 自力解決のとき、図だけで調べていて、途中から対応する値が分からなくなった子どもが、困ったことを全体の場で問いかけるところから話し合いを導き、その疑問に答えていくように発言をつないでいった。



図にかいてみたけれど、
途中で分からなくなったよ。

③ 一人の子どもが全てを説明するのではなく、同じ考えの人をリレー方式でつなぎながら説明させることで、話し合いに意欲的に取り組めるようにした。また、発表ボードに自分の考えを全てかかせず、実際に黒板の前で説明しながら表にかき込ませたり、図を使って説明させたりすることで、聞き手に思考過程がより伝わりやすい説明になるようにした。

④ 「式と表をつなぐ」「図と表をつなぐ」「具体操作と表の変化をつなぐ」等考えをつないでいけるように、言葉→図→式→表と意図的に順に取り上げ、反応を組織化していくことで、思考が高まっていく話し合いになるようにした。



4 手立ての効果

本実践の中で、「折る回数×2＝長方形の数」と「折る回数が1増えると長方形の数が2倍になっていく」という2つの見方が明確になるように子どもの見方を整理することで、「何が何の2倍か」という話し合いの視点をもたせることができた。また、言葉や図、式、表といった方法で解決を図る中で、変化のきまりを見付ける手順の大切さや各表現方法のよさを実感することができた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

「話し合いたい」という意欲を高めるためには、子どもたちの中から問いが生まれ、学習問題を一緒につくり上げていくことが大切である。学習問題が明確であると、視点に沿った話し合いができ、それがまとめへとつながっていく。そのためにも、授業の中で子どもたちに何を習得してほしいかを考え、学習問題をつくってほしい。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いの課題を明確にする指導 工夫する箇所を絞って課題を焦点化する

中学校第3学年 音楽（歌唱） 題材「カンツォーネの表現を工夫しよう」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

自分なりの思いをもった歌唱表現の工夫を言葉で伝える力

2 実践の概要

表現活動では、子どもが音楽の流れや歌詞に共感することで、表現の意欲が高まる。子ども同士で積極的に話し合い、歌唱表現を深める活動となるように、**全員で歌って曲の流れや感じをつかませ、歌詞の内容に触れて心情を想像させてから、表現のポイント**を2箇所に絞って工夫させた。個人で自分なりの思いや考えをもたせてから、**グループ活動にすることで、より積極的に活動することができる**と考えた。

3 手立ての具体

次のように展開し、話し合いの課題を明確にもって歌唱表現を深めさせるよう考えた。

① 歌詞の内容を理解させるために、**日本語訳の歌詞とそれを分かりやすく訳したワークシートを使って考えさせる。**

② **表現のポイントを音乐的に特徴のある部分と曲中で何度か使われている印象的な歌詞の2箇所に絞り、楽譜中の表現のポイントに印をつけて個人の考えをもたせてから、グループで話し合ったり歌ったりして表現の工夫をさせた。**

③ 発表の際には、話し合っ**て工夫した表現を言葉で説明してから歌唱表現させた。**

4 手立ての効果

音楽や歌詞の理解についての意見交換では、友だちの意見は、自分の考えと似ているところがあると共感的に意見を述べ合ったり、疑問点を確かめ合ったりして、歌詞の共感につながる話し合いになっていた。

歌唱表現の工夫を考える際、着目する音楽的な要素を絞ることで、どの子どもも本時はどの部分をどのように工夫して表現したらいいのかが理解でき、自分なりの思いをめぐらせることができていた。

グループでの話し合いや発表時には、同じ歌詞であっても強弱が正反対の表現について、どうしてそう考えたのかの話し合いが盛り上がった。そして、思いを表現する仕方はいろいろあることを理解していった。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

子どもたちが積極的に音楽表現の工夫に取り組めるようにするためには、曲中のどの部分の何を工夫したらよいかを理解させてから取りかかせることが大切である。

そのために着目する音楽的な要素を絞る等、子ども一人一人が自分の考えをもてるようにする必要がある。

「帰れソレントへ」

つらねの海は うつつにも暮れ 君の背のどと 我が胸を打つ オレシジの海は ほのかにも暮り 空に響く この胸にぞしむる あわれみは行き 君はか一人 懐かしき地こそ 君を待つのみ 帰れよ 帰れよ 帰れソレントへ 帰れよ	夢のように美しいソレントの海は 君の背のよさげ 私の胸を打つ オレシジの海は ほのかにも暮り 空に響いている私の胸にしむる 君は行ってしまひ 君はか一人 君と一緒はほごしソレントの町で 君の帰りを待つしかできない 帰って来て！ 君を忘れなさいで！ 帰って ソレントに帰って来て！
--	---

【考えよう】
君はか一人
君はか一人
君はか一人

「帰れソレントへ」

《ハルシヨナリ》を強度や速度的に変化で表現しよう。
・強度や速度的に変化する箇所を記入して、歌ってみよう。

【本時のワークシート】

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いの課題を明確にする指導 分類することで偏りに気付かせる

中学校第1学年 技術・家庭 単元「環境や資源を考えて生活しよう」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

自分や家族の生活を見直し、環境に配慮した消費生活を実践するための工夫を知るために、自分たちの身の回りの「もったいない」を振り返り、グループで話し合う活動を通して、自分たちの生活の課題に気付く力

2 実践の概要

身の周りの「もったいない」を振り返り、付箋紙に色分けしながら（緑色…している 黄色…少しはしている 赤色…知っているけどしていない）記入する。その後、グループで衣・食・住・その他の項目別に3つに分類してカードに貼る。付箋紙の色の偏りを確認することで、緑色や黄色の付箋が多い項目に課題があることに気付かせる。「もったいない」を防ぐ具体的な方法をグループで話し合う。グループで話し合った内容を発表して全体で交流する。終末に、今日からの自分の実践目標を具体的に考え、家族に向けてメッセージカードを作成する。

3 手立ての具体

① 自分や家族の生活を振り返り、身の回りのもったいないを見付け、3色の付箋紙に色分けして記入する。具体的な例を挙げながら、自分が学校や家庭でしていることを振り返って記入させた。

② 話し合いの課題を明確にするために、記入した付箋を衣・食・住・その他の項目に分類させた。分類した付箋紙の色の偏りを確認することで、自分たちが、衣・食・住・その他のどの場面で「もったいない」行動をとっているかに気付かせた。

見つけた課題について、「もったいない」行動をとってしまう理由を考えさせることで、環境に配慮した消費生活に変えていくためには、どうすればよいかを話し合わせた。

③ 自分が考えた課題以外の解決策を知らせ、環境に配慮した消費生活への工夫を理解させるために、グループの話し合いの内容を共有させた。

④ 自分の実践目標を考え、家族や地域の人に伝えるためにメッセージカードを作成した。



【付箋紙の色の偏りを確認する子ども】

4 手立ての効果

3色の付箋紙に意見を書くことで、課題を視覚的にとらえることができた。このことにより、自分の課題が明確になるだけでなく、見通しをもって話し合い活動に取り組めた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

教師自身が話し合い活動の視点を明確にしておくことが必要である。それに基づいて、意図的に指示や助言を与えるようにすると、子どもは自分の意見やグループの考えに自信をもって、躊躇せず発表ができ、多くの意見が出されることで話し合いを広げたり、深めたりすることができる。

V 話し合いが苦手な子どものための指導

「さぬきの授業 基礎・基本」には、「話し合いが苦手な子どものための指導」について、次のように述べられています。

話し合いが苦手な子どものために

- ☆ 既習内容の理解が不十分な子どもには
 - 話し合っている内容について、教科書やノートのどこに書いているかを明示する
 - 黒板等に既習内容を書いておく
- ☆ まとめるのが苦手な子どもには
 - 5分の説明より、1分の沈黙で自分の考えをもたせる
 - 文型の掲示や個別説明、適切な接続詞を入れる
- ☆ 人前での発言が苦手な子どもには
 - 教師が子どもの発言にうなづく（肯定的表現）
 - 教室の発言者から最も遠いところに立って聞く
 - 1対1、4人程度、10人程度、学級全体と、段階を追いながら話し合わせる
- ☆ 安心して発言できる雰囲気づくり

これらを基にした実践では、次のようなことが明らかになってきました。

「目的に応じた書き方を指導する」とは？ -考えをつくったり、深めたりするノート指導-

- 言葉を補う自作資料の活用
- イメージ図の表現をもとに話し合わせる
- 話し合う場面や手順を焦点化する
- ペア等少人数の話し合いで自信をもたせる
- 全体の話し合いで話し合いの仕方のモデルを示す
- 共通体験や共に作り上げたものを基に話し合わせる
- 発言の機会を増やす
- 図、式、表等の多様な表現物をもとに話し合わせる
- 机間指導の際に一度、自分の考えを説明させておく
- ①友達と同じか否か、②自分の考え、③その理由と3文で話すよう促し段階的に評価する
- 身体表現等をさせた後、そのように表現した理由を説明させる
- うなづく、あいづち等聞き方のスキルを具体的に指導する
- 相手の目を見て話すのが難しい場合は、相手の口を見ながら話すように助言する
- 話し合いで気付いたことをメモできるようワークシートを工夫する
- 話し合う前にグラフや絵等で自分の考えを表現させておく
- 録音した自分たちの演奏等話し合いの材料を提供する
- 既習のノートやポートフォリオを使って説明させる

ここでは、■の項目について、実践事例を紹介します。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いが苦手な子どものための指導 言葉を補う自作資料の活用

小学校第4学年 社会 単元「事故や事件からくらしを守ろう」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

校区で交通立哨をしている人の分布図をもとに話し合う力

2 実践の概要

学習問題「交通立哨をしている人はどのようにわたしたちを守っているのだろう」を追究した。交通立哨の仕組みを理解するためには、交通立哨をしているのはどんな立場の人なのか、どこで立哨をしているのかを理解することが必要である。そのために自分たちで交通立哨の分布について調べてきたことからみんなで作り上げた「校区の交通立哨マップ」を中心資料として用いた。自分たちが作成した地図での話し合いであったので、普段自信をもって望めない子どもも地図を指し示しながら説明し、自信をもって発表や話し合いができた。

3 手立ての具体

具体的には、次の2つの手立てを行った。

- ① 自分たちが調べ（体験し）たことをもとに、資料「校区の交通立哨マップ」を作成させる。
- ② 自分で考える時間をしっかり確保し、発表する際には、資料「校区の交通立哨マップ」を用いて説明させる



【自分たちで作った地図】

個人で交通立哨の分布や立場について調べてきたことを出し合った。それをもとに、「校区の交通立哨マップ」を作成した。



【黒板まで来て地図を指し示しながら説明させる】

発表の際、言葉だけで説明をしたのでは伝わりにくい。そこでその際には必ず「校区の交通立哨マップ」を使って説明した。

4 手立ての効果

- ① 自分たちで作った「校区の交通立哨マップ」を中心資料に用いたことで、子どもは自信をもって発表をすることができた。地域の身近な資料であり、共通理解ができていたため意欲的に聞いた。教科書の資料や教師が作った資料をただ提示するだけよりも話し合いに参加しにくかった子どもが意欲的に参加できた。
- ② 個人で考える時間を確保したことで自分の考えに自信をもって話すことができた。発表をさせる際には、地図を指し示しながら話させることで発言の根拠が明確になった。すると「その交差点は危険だね」や「あぁ、その交差点にはいつも〇〇さんが立哨をしているよ」等と聞いている子どもにとって分かりやすかったようである。習慣化していくことでどんどん前に来て発表ができるようになってきた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

話し合いが苦手な子どもが話し合いを好きになるためには、全ての子どもに話し合いの機会を与えて経験を重ね、自信をつけさせていくことが大切である。また、共通経験のあるものや共に作り上げたものを基に話し合わせることも効果的である。

さめきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いが苦手な子どものための指導 イメージ図の表現をもとに話し合わせる

小学校第6学年 理科 単元「大地のつくりと変化」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

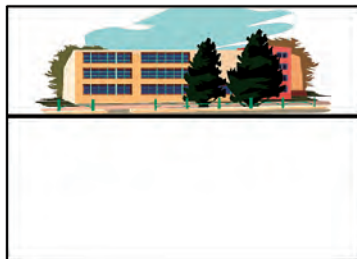
地面の下の様子について子どもたち一人ひとりが予想したことを基に、グループでの話し合いを通して意見をまとめていく力

2 実践の概要

学習問題「地面の下はどうなっているのだろうか？」を追究した。資料や既習経験を基に地面の下のイメージ図を書かせたり、視点をもってグループで話し合わせたりすることにより、主体的に話し合い活動に取り組み、意見をまとめさせようと考えた。

3 手立ての具体

① 学校の地面の下の様子を一人ひとり予想し、イメージ図に書かせる。その際、地域の地図や地域で採れる石、地域の露頭写真等を提示することで、根拠のある予想を考えられるよう促した。



【イメージ図】

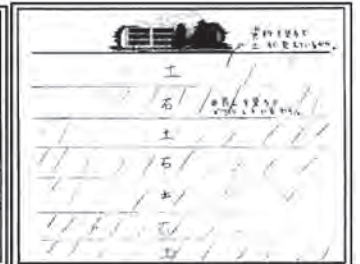
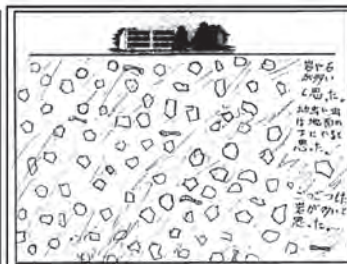
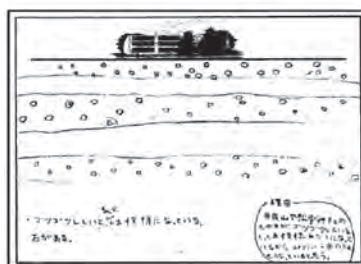


【地域で採れる石】



【地域の露頭写真】

② イメージ図を基に、グループで話し合いを行い、意見をまとめさせる。その際、信頼性を視点として、それぞれの予想を3つに分類するよう促した。



【子どもの予想(一部)】

【話し合いの視点】

- ・確かだろう！（信頼性：高）
- ・確かなあ？（信頼性：中）
- ・確かではない！（信頼性：低）



【グループでの話し合い】



【全体交流】

4 手立ての効果

地域の資料を提示してから学校の地面の下の様子を予想させたことにより、自由にイメージをしながらも、根拠をもった自分なりの考えをもたせることができた。また、信頼性を視点に話し合いをさせたことにより、お互いの意見を比較しながら主体的に話し合い活動に取り組むことができ、全体交流では自信をもって発表する姿が見られた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

話し合い活動を行うためには、学級の話し合う雰囲気づくりが基盤となる。また、理科での話し合い活動の内容によっては、理科室や教室等学習環境を選択することが必要である。

さぬきの授業 基礎・基本Ⅱ-2 話し合いが苦手な子どものための指導 話し合う場面や手順を焦点化する

小学校第3学年 体育 単元「ピタッと着地！ ー跳び箱運動ー」

1 本実践で身に付けさせたい「話し合う力」

理想とする台上前転の動きを目指して、自己の課題を的確に設定していくために、課題となる動き（体の部位の位置やタイミング、強さ等）について伝え合う力

2 実践の概要

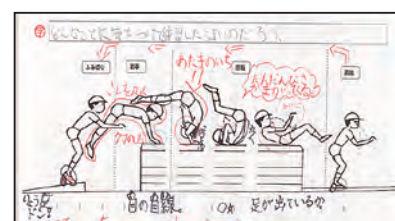
ピタッと着地が決まる台上前転を目指して、本時の学習問題を「どんなことに気を付けて練習すればよいのだろう」と設定した。理想のモデルと自分の動きとを比較して課題を大まかに捉えた後、その課題について話し合いながら練習をすることで課題を明確に設定した。その際、**話し合うことが苦手と感じている子どもに対する個の支援と、自分の考えを素直に表出させる学級の雰囲気づくりという集団への支援の両面から、話し合い活動を活性化**し、本時の課題設定に活かした。

3 手立ての具体

具体的には、以下のような支援を行った。

① 自分の考えをもたせるための支援

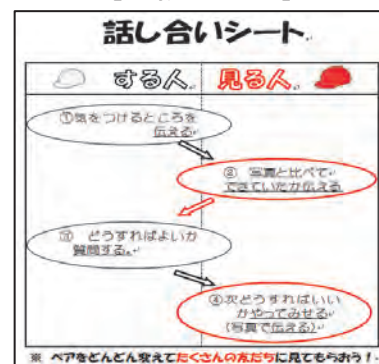
話し合いは、個々に考えをもたせることから始まる。そこで、本実践では、**どの局面の動きに着目すればよいのかを、分解図を用いて明確にし、局面ごとの具体的な動きのポイントを把握させた**。自分の考えをしっかりとらせることが、話し合いの成立につながる。



【分解図の活用】

② 話し合いの技能を高める手順シート

相手に伝えたいことがあってもなかなか言い出せなかったり、逆に自己主張の強い子どもが一方向的にアドバイスをしてしまったりすることがある。そこで、右のような「**話し合いシート**」で話し合う手順を提示し、「**誰が・いつ・何について**」話したらよいのか分かるようにした。さらに、どのような言葉で伝えればよいのかが分からない子どもには、シートの裏面に話型を示すことで、スムーズなやりとりができるようにした。



【話し合いの手順シート】

③ よさを認め合う雰囲気づくり

話し合いを促進するためには、お互いによさを認め合う雰囲気が必要となる。そこで、ペアを固定せずに**練習の場で出会った友達とハイタッチをしてから話し合いを始めるようにした**。これを「ハイタッチペア」と名付け、**どんな相手とでも関わることができる楽しい雰囲気を醸成した**。

4 手立ての効果

器械運動はできる・できないがはっきりしているため、できていないことに目が向きやすく、話し合いと言っても、一方向的な指摘や助言になりがちである。本実践では、話し合いの視点を「的確な課題設定ができていないか」に焦点化した。そうすることで、「着手に課題があることが自分で分かっているすごいね。」と課題設定のよさを認めたり、友達の意見を肯定的に受け止め、技能の向上につなげたりすることができた。

5 若い先生のためのワンポイントアドバイス

話し合う力を高めるためには、個別に技能を高める等の支援と同様に、学級集団に働きかける支援が大切である。話す側がいくら話すスキルを身に付けても、聞き手がそのメッセージを受け取ることができなければ、話し合いは成立しない。日常の授業・学級経営の中で、子どもたちを「聴き合う」集団にしていくことが大切である。

VI おわりに

学校教育と家庭教育の大きな違いは、集団の中で個を育てている点にあります。友達や教師と話し合い、学び合うことは、学校の存在意義そのものと言っていいかもしれません。自由に活発な話し合いを期待するならば、教師自身が発言の回数や正しい意見のみにこだわってはいけません。子どもの話し合う力は育ちません。まず、私たちが一人一人の発言を大事にすることに力を注いでいきたいものです。子どもは子どもの文脈でものごとを理解します。目の前の子どもがどのような文脈で新しい情報を受け止めているのか、まずは子どもの発言に耳を傾けていくことが、話す力を育てることにつながっていくことなのでしょう。

そして、子どもたちが、伸び伸びと活発に話し合い活動を行うためには、自分の発言を肯定的に受け止めてくれる学級の雰囲気が必要です。自分に自信がもてない子どもにとっては、なおさらです。例えば、「何を言ったか」ではなく、「誰が言ったか」が重要視される学級では、誰もが皆等しく発言しようという気持ちにはなれないでしょう。さらに問われるのは、子どもの発言を取り上げる教師の姿勢です。「拙い表現ほどもっと詳しく聞いてみたい。不完全な発言ほど面白い。誤答こそ学びのチャンス」と捉えるか。それとも「効率よく正答が出てくればいいな。間違いや的外れな意見は困るな」と捉えるか。教師の姿勢を子どもはよく見ているものです。リアクションが次のアクションを左右するのですから、教師自身を含め、周りの聞き手のリアクションと話し手のアクションは、セットで指導していくことが大切なことだと言えそうです。

実践を通して、聞き方の指導から始めること、言葉を補う表現物を活用すること、視点を共有すること、論点を焦点化すること、話し合う手順や方法を明示すること等、活発な話し合い活動のために大切にすべきことがたくさん見えてきました。

また、話し合うこと自体は目的ではなくあくまで手段ですから、何のために話し合うのか、子どもの側のめあて（目的意識）とさらにその先にある教師の側のねらい（付けたい力）を見定めておくことが重要であることも分かってきました。

さらに、話し合いの苦手な子どものために型を指導することも時には重要ですが、二重の苦痛（ダブルタスク）になる怖れがあるため、「守・破・離」と段階的に型から卒業していくことも重要であること。ペア、グループ、学級全体と、徐々に話し合いの場を広げていく方向だけでなく、逆に全体の話合いでモデルを示した後に、ペアやグループで話し合わせるといった方法もあること。話し合いの前に一人一人に自分の考えをしっかりと書かせた方がよいと考えがちですが、あえて自分の考えが未完成の状態でも話し合わせることの方が、集団の考えが発展したり、よい交流が生まれやすくなることもあること。こういったことについては、まだまだ研究を深めていく余地がありそうです。

本冊子が、個人の指導技術を磨いたり、話し合いの意義を見直すきっかけとなったりして日々の授業を改善する一助となれば幸いです。

さぬきっ子 学びの三訓

- 一 準備して
- 二 姿勢整え
- 三 しっかり聞こう



香川県教育委員会



さぬきの教員 かわりの三訓

- 一 共感的に受け止め
- 二 チームの力で
- 三 毅然と粘り強く



香川県教育委員会